筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第五十三回）

# 「遣新羅使と万葉集～その８～」

## ～韓亭（からとまり）（現・唐泊）での歌～

天平八年（７３６）の遣新羅使一行は、順風を得ることができなかったのか一カ月も足止めとなった筑紫館（つくしのむろつみ）（現・福岡市中央区城内）から出航することができた。しかし、この時期は台風シーズンだったらしく、博多湾内にあった那の大津を出港後、間もなく湾内西北へ約１２ｋｍ離れた位置にある玄界灘に突出した糸島半島の突端東に近い停泊地「韓亭」に風待ちで仮泊することになる。この時に使人たちが作った次の題詞の歌が万葉集に収められている。

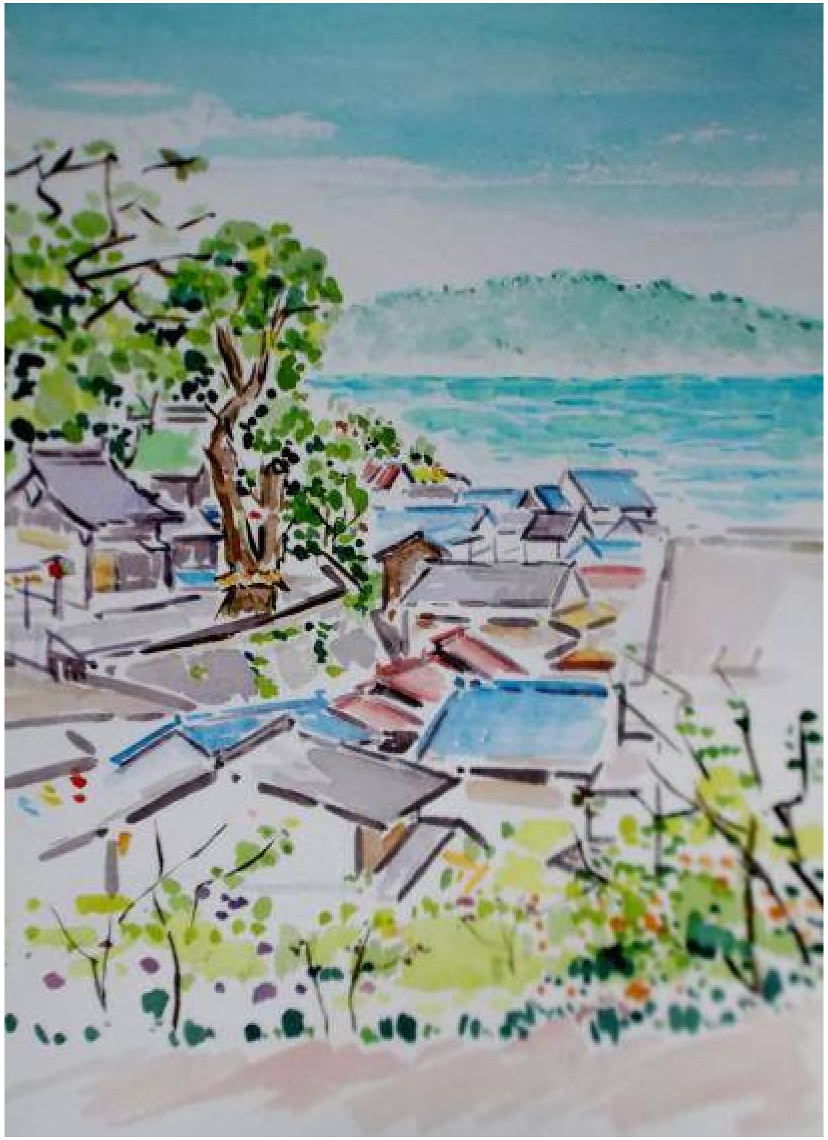
「筑前国志麻郡（つくしのみちのくちしまのこほり）の韓亭（からとまり）に到着し、碇泊して三日を過ぎた。その時に、夜月の光がこうこうと海面を照らす光景に接し急に旅愁を覚え、各人がその心情を述べて作った歌六首」がある。

「筑前の国志麻郡の韓亭」は日本歴史地名大系「福岡県の地名」などには、【奈良時代からみえる湊。糸島半島の東の突端部にあたる。対外航路の重要地で、韓人をはじめ内外の外交使節が宿泊する施設があったことから「韓亭」の名が付いたと推測される。】とあり、現在の福岡市西区宮浦、地内の地域名である「唐泊」に比定されている。

1）韓亭（からとまり）　能許（のこ）の浦波
立たぬ日は　あれども
家に　恋ひぬ日はなし

作者未詳　巻十五―三六七〇

（解説）ここ韓亭（現唐泊）、能許の浦に波の立たない日はあるけれども、遠く離れて来た我が家を恋しく思わない日はない。



・「写生地1」は唐泊集落の西背後の丘陵地に建つ、古寺・東林寺

（山号・唐泊山）境内から眼下に漁港近くの漁村と「能許の浦」と呼ばれた入海（いりうみ）と東方に約六キロ隔てた対岸に博多湾の中央からやや西寄りの海上に浮かぶ能許（現・「能古島」＝福岡市西区）を描く。

（杏花）

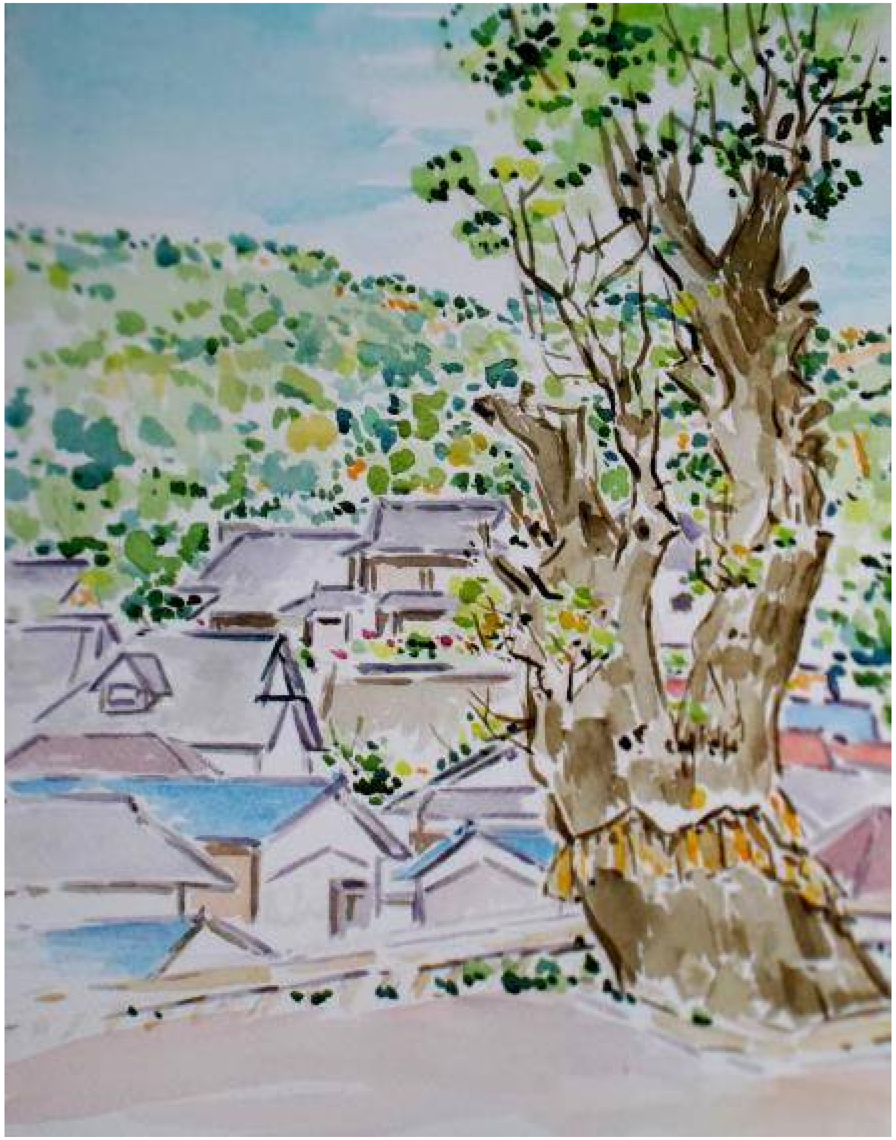
## 2）風吹けば　沖つ白波
## 恐（かしこ）みと　能許（のこ）の亭（とまり）に
## あまた夜そ寝（ぬ）る

作者未詳　巻十五―三六七三

（解説）風が吹くので、沖の白波の恐ろしさに、能許のとまりに幾晩も寝ることである。

・瀬戸内海航路といっても古代においては現在のような安全な航海ではなかったに違いない。現に天平八年の遣新羅使たちも、九州上陸に際して暴風雨に遭って、命からがら、豊前国（現・大分県中津市）に上陸しているのである。その時のことを思いだし、沖の白波をみれば恐ろしく感じる気持ちを歌っていると思われる。

「韓亭」は糸島半島北東部、旧北崎村の港町、「唐泊」で、現在は福岡市の内である。唐泊の港は博多湾の入口西側に在って、東側は能古島で東風を。北の灘山（標高２１０ｍ）で北風をさえぎり、港口が南に向いているので玄界灘からの荒波をよけるのに都合がよく停泊に好適な場所にあるため古代から避難港に利用されていたようである。



（写生地２）唐泊港の北の小高い丘の中腹に鎮座する村の鎮守社「大歳宮（おおとしぐう）」境内から眼下に難山の麓に古代韓人を初め内外の外交使節が宿泊する施設があったと伝えられる唐泊の家並みを描く（杏花）

（参考文献）・日本古典文学大系・日本歴史地名大系「福岡県の地名」・上野誠「万葉びとの筑紫」他

・「韓亭（唐泊）位置図」

（交通経路）韓泊へは福岡市地下鉄が乗り入れしているＪＲ筑肥線「筑前前原」でバスに乗り換え宮ノ浦で下車し東へ約１ｋｍ海岸沿いに進むと唐泊漁港、漁村に至る。